初午

平成二年二月五日号

二月の初めての午の日を初午と言い、お稲荷さんの縁日です。平成二年は、幾つかの稲荷神社でお祭りが行われました。

今回は広見東本町の草間勝さんにお稲荷さんのことを伺いました。

お稲荷さんは、招福・除災・財福の神として知られていますが、昔は開墾地の守り神として盛んに祭られていました。

苦難続きの開墾

産業といえば農業ぐらいしかなかった昔々のことです。

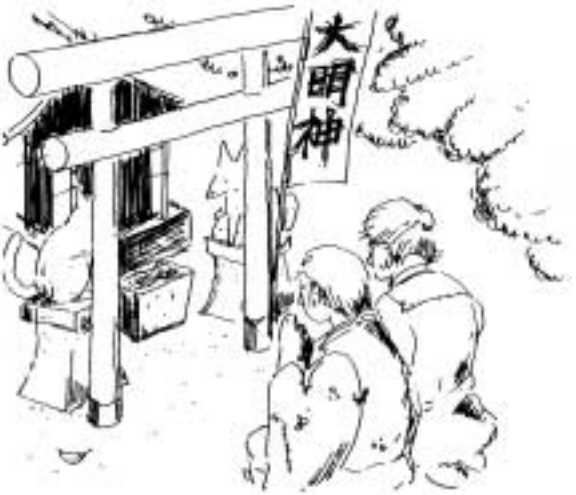
私たちの先祖は穀類や野菜の生産を高めるために、農地の開墾に精を出していました。

富士市は今でこそ豊かな土地ですが、昔は必ずしもそうではありませんでした。

市の北部は水がなく、畑につくられるものは限られていました。東部は、浮島沼が一面に広がってはいましたが、田んぼは逆潮の被害などに幾度となく遭い、満足に収穫できませんでした。そして、南部は高波、西部は富士川の洪水に見舞われ、開墾作業は自然との闘いでもありました。

ましてや、昔は、今のようにブルドーザーやトラックはありません。人間が牛馬などを使って少しずつ切り開くしかなかったのです。

ですから開墾地を守り、豊作を祈る稲荷さんが広まったのは、当然のことかもしれません。



農業の始まりの日

また、昔の人々の生活にはえとが深くかかわっていましたので、農事暦はえとで決められることが通例でした。二月の初午は、本格的な春の農業の始まりの日と言うことができます。

現在の初午は、「正一位稲荷大明神」と書かれたのぼりが立てられたりはしますが、祭りそのものは、にぎやかな催しはあまり行われていません。お稲荷さんと言えば商売繁盛のイメージが強くなってきたのは、時代の流れでしょうか。

語ってくれた方
草間　勝さん